令和６年
1
No.104

寺子屋だより

乃木夫妻像

乃木旧邸

碑のこころ
乃木将軍旧邸
［下関市長府宮ノ内 乃木神社境内］
※詳しい解説は12頁に掲載しています

※題字／森川芳聲

もくじ

2 巻頭言『謹賀新年』……山口　秀範
3 志明館開校の年を迎えて……八尋　太郎
4 新春対談～教育の未来を語る～……白濱　裕　山口　秀範
6 橋を架ける⑤……占部　賢志
8 IGNITE YOUR GENIUS（君の才能に火を点けろ！）……水崎　之子
9 やっぱり神様が好き（第三回）……元木　哲三
10 TERAKOYAふぉとれぽーと
11 〝あちこちde寺子屋〟のご案内
12 碑のこころ（9）　編集余録

巻頭言

謹賀新年

代表世話役
山口 秀範

皆様お揃いで清々しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。平素寺子屋モデルの事業にご理解ご支援を賜り心から御礼申し上げます。新しい年も一層活動の輪を広げて参りますのでご期待ください。

『論語』に見る人づくり

二年前から福岡中小企業経営者協会（中経協）の早朝勉強会で、渋沢栄一の『論語と算盤』を毎月読んでいます。新一万円札の顔となる渋沢は日本資本主義の父と称され、生涯に五百社の設立に関わり、同時に六百を超える教育・社会福祉活動を応援しました。企業目的の利益追求を肯定しつつ、公益・道義を両立させるという「道徳経済合一説」に基づいて、渋沢が当時の若手経済人や学生に語った集大成が本書にまとめられています。内容は経営者自身の心構え、勉強・修養のすすめが中心ですが、どんな人材が世に求められるかにも話題が及びます。そこで渋沢は論語冒頭の学而篇二「君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝悌なるものは其れ仁の本たるか」（君子は物事の根本に力を尽くす。そうしてこそ進むべき道は明らかになる。親思いで目上の人を敬うことが最高の徳「仁」を得る根本であろう）を引用しつつ、「本を務む」とは知識修得の前に心の学問を積むことである。その根本を確立して初めて、将来進むべき専門分野が見えてくると言います。

また「古の学者は己れの為にし、今の学者は人の為にす」について、初めから目的をしっかり持って学問するのが「己の為」で、人に認められたいという動機では成果は覚束ないと指摘しています。いずれも、実務能力を磨く以前に身を修める学びの重要性を説いています。

古代日本に求められた人財

『日本書紀』の通読は四年前から、やはり毎月一回朝早くに集まる人々と続けているのですが、最近「大化の改新」の件で、孝徳天皇の詔の中に大変興味深い箇所を発見しました。この改新は豪族たちの私有地・私有民を廃して国有とした上で、地方の行政制度を確立するという画期的な取り組みでしたが、その中で地方行政官の選定基準として、例えば地方長官である郡司には「性識清廉くして時の務に堪ふる者を」（人となりが正しく、実務に堪能な人物を）その補佐には「強くいさをしく聡敏くして、書算に工なる者を」（しっかりして聡明鋭敏なうえに、国語数学が得意な人を）充てよとあります。役職に応じた知識・能力以前に人間性・心構えを重視しているのです。

古代の官吏の求人要件が、実務能力のみならず渋沢栄一の言う精神の修養にも及んで、両面を求めていたのは驚くべきことです。

志明館教師の資質

孔子に亜ぐ聖人―亞聖―と呼ばれた孟子は「君子に三つの楽あり。父母俱に存し、兄弟故なきは一の楽なり。仰いで天に愧じず、俯して人に怍じざるは二の楽なり。天下の英才を得て之を教育するは三の楽なり」と語り、次代のリーダー教育を最高の任務と位置付けています。それと同次元の楽しみとして、家族の息災と天地に恥じない生き方を置いていることにも注目すべきでしょう。

三ケ月後の開校に向けて、志明館教師たちの諸準備は佳境に入っています。昨年四月から毎週継続してきた研修の成果発表で、自国の歴史・伝統への誇りに目覚め、美しい母国語を見直し、大自然に生かされている自分を見つめなおしたと異口同音に語りました。「学び続ける教師」たちが天下の英才の卵を迎える日は愈々間近に迫って来ました。

（お願いとお知らせ）

＊これまでも多くの方々から志明館へご支援を賜って参りましたが、開校へ最後のお願いを同封しています。何卒よろしくお願い申し上げます。

＊橘曙覧の歌に「春に明けてまづみる書も天地のはじめの時と読み出づるかな」があります。正月に『古事記』冒頭の一節「天地のはじめの時」を読み悠久の歴史を偲んでいたようです。神武天皇の建国への旅をテーマにした交声曲「海道東征」を聴きながら、建国記念日の時期を過ごしませんか。福岡でのライブ録音CD（三千円）ご希望の方は当社までご一報を。